

境界領域における酪農開発と軍事基地化

——北海道東部の矢臼別演習場の誘致過程に着目して——

同志社大学〈奄美・沖縄・琉球〉研究センター 番匠健一

〔目的〕

1950年代後半の北海道東部の農業開発と軍事基地の誘致の歴史過程から、地域社会の「軍事化」を考察することを目的とする。北海道東部の別海町はソ連が占領する北方4島のうち国後島が視認できる位置にあり、軍事的・領土的・人の移動において境界領域といえることができる。本発表でとりあげる根釧パイロットファームは、北海道東部の根釧原野において世界銀行のODA資金によって行われた農業開発事業である。このプロジェクトは、世界銀行の融資を受けた大規模プロジェクトであり、ブルドーザーやレーキドーザーなどの農業機械によって土地を造成する方法は「根釧方式」としてその後の北海道開発のモデルとなったとされる。しかし、この農業プロジェクトは、入植者に分割された土地の土壌、輸入された牛の品質、事業推進者による営農設計の不備などによって、多数の離農者・夜逃げをともしなう問題を抱えていた。1958年には、別海村議会で自衛隊基地誘致の陳情書が提出され、その後基地誘致の動きが急速に進む。本発表では、農業問題のための地域の再編成と軍事基地の誘致のプロセスが関係していることを検証する。

〔方法〕

根釧パイロットファームの開発計画に関わる資料を分析し、農業経営に大きな問題が出てきた1960年代前後における開発計画の変遷を検証する。同時期に別海村議会で農業開発の不振が問題として取り上げられ、多数の議員によって自衛隊基地の視察や誘致活動がおこなわれていく過程を検証する。本発表では、日本国内の軍事研究が圧倒的に米軍研究に集中している状況のなかで、地域社会における自衛隊を見えにくい軍事化のプロセスとして俎上に載せ、既存の軍事研究ではとらえきれない軍事化のすそ野を提示したい。

〔結果〕

1950年代後半において北海道東部に酪農産業拠点と産業道路のハブが建設される計画であったものが、1960年を前後して計画が修正され酪農開発プロジェクトが大きく変更されていることが確認できる。これらの産業拠点や産業道路のハブが建設予定であった地域は、1960年以降に夏季に限定した軍事演習場として使用されていたが、その後は防衛庁によって土地が買い上げられ矢臼別軍事演習場として現在に至る。

〔結論〕

1960年前後に起こった矢臼別軍事演習場の誘致に関して、①防衛庁側の基地の誘致の働きかけ、に加え、②農業経営の不振によって大規模開発プロジェクトが回らなくなった地域社会からの要求、③ソ連が軍事占領する北方4島の軍事基地化という要素が重なっていたといえる。②の延長線上として、この地域の自衛隊の民生活動における酪農支援や農協との関係性を研究する必要がある。